

今までの辞典は、“呈”も“告”も「“口”の部」に収めていますが、“程”は“禾”の部に収めており、“造”は“辵”の部に収めています。しかし、この辞典では、“呈”も“告”も「口の部」にあります。しかし、“呈”の次に“程”を、“告”の次には“造”を収めています。“告”の理解には“造”の理解が役立ち、“造”の理解には“告”の理解がぜひ必要だからです。

このように、「口の部」の“古”の次には「故・枯・固・個・湖……」を、“召”の次には「招・詔・紹・昭・照・沼・超」を、“可”の次には「河・何・荷」を、“奇”の次には「崎・騎・寄」を、“周”の次には「週・調・彫」を、“呉”の次には「娛・誤・虞」等々を収めました。これで一字の理解が数字の理解に及ぶばかりでなく、知識が論理的に体系化されることによって確かな記憶になります。

従って、P13の本文もくじを御覧下されれば判りますように、赤い字の大部首の中に黒い字の小部首があり、収容されている漢字が完全に体系化されています。故に、この辞典は一ページから最後のページまで楽しい推理小説を読むような気持で読むことが出来るばかりではなく、読み終わった時には強力な漢字力が身に着くことは間違いありません。それはこの辞典に収められていない漢字の意味や発音をも推理することが出来る力です。

どんな学問をするにしても、書物を読んでそれを理解することが基

本ですが、そのためには漢字力が最も大切です。漢字力の強い人は、普通の人がかかかって読み終える本を一時間で読み終えることが出来るばかりでなく、内容を正しく深く理解することが出来るのです。だから、人間として最も大切な能力は漢字力だと言ってさしつかえないと思います。

それで、新学習指導要領でも漢字学習を一層重視するように改善されました。しかし、今までの“がむしゃらな練習”による丸暗記では理解できず、なかなか覚えられません。どうしても漢字を分解し、論理的に学習することが必要です。従って、論理的に解字する辞典が多く出版されるようになりましたが、数人の先生が分担して編集しているために、“故”と“固”と“個”の“古”の解字がまちまちで、どれを採るべきか迷うことが少なくありません。

それで本書は、私が独りで通して解字しました。解字には昔から諸説がありますが、最も解りやすい説を採り、従来の説では満足できないものは独創を加えました。総じて、初学者にも漢字が楽しく学習でき、理解が深められますよう、平易な解字に努めましたのでどなたにも楽しんで利用して頂けると存じます。御愛用を願います。

平成3年12月5日

教育学博士 石井 勲